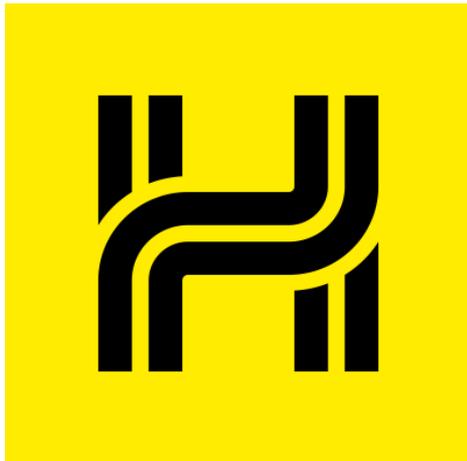


Yes we can ? オープンサイエンスは人文・社会科学を変えるか？



北本 朝展

ROIS-DS人文学オープンデータ共同利
用センター CODH / 国立情報学研究所

<http://researchmap.jp/kitamoto/>

@KitamotoAsanobu

「人文・社会科学とオープンサイエンス」セッション概要

人文・社会科学においてもオープンサイエンスが重要な課題となりつつあり、オープンサイエンスを支援する研究基盤の構築に向けた大規模プロジェクトも動き始めた。

また、分野や学術の様々な壁をまたいだコラボレーションなどの新しいアイデアを取り入れ、研究成果の利活用や普及につなげていくことへの期待も高まっている。

そこで、人文・社会科学の分野でオープンサイエンスに取り組む方々をお招きし、会場の方々も交えながら、これまでの事例と今後の見通しを共有する。

昨年の招待講演者

1. **山本 和明**（国文学研究資料館）「人文学の
検証可能性とオープンデータ」
2. **橋本 雄太**（国立歴史民俗博物館）「歴史地
震研究における異分野連携とシチズンサイエ
ンス」
3. **小風 尚樹**（東京大学大学院）「歴史学系院
生によるオープン・コミュニティの構築：
Tokyo Digital Historyの挑戦」

いずれの講演でも、人文学の新たな可能性を示
していただいた。

今年の招待講演者

1. **前田 幸男**（日本学術振興会人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進センター／東京大学大学院 情報学環）
「人文学・社会科学のデータ共有基盤について」
2. **後藤 真**（国立歴史民俗博物館）
「見える人文・見えない人文？ オープンな人文学情報基盤が作る未来」
3. **北村 紗衣**（武蔵大学）
「ブラックホールと啓示：ウィキペディアと研究・教育」

招待講演の構成

1. 「政策」でできること
 2. 「組織（分野）」でできること
 3. 「個人」でできること
- 3つの異なるレベルで、オープンサイエンスに関係しそうな活動をご紹介いただく。
 - どんなことが進みつつあるのか、どんなことがこれから可能となるのか、を共有する。
 - 概念や事例の共有が、参加者の皆さん自身のアクションにつながるとうれしい。

オープンサイエンス運動

透明性

オープンアクセス

共有

オープンピアレビュー

オープンデータ

研究の再現性・
透明性・研究
データ保存

研究データ
データ出版
データリポジトリ

オープンサイエンス

市民科学・クラウドファンディング

コラボレーション・オープンイノベーション

超学際研究

参加

協働

メタ研究 = 研究（システム）に関する研究

オープンデータの問題

1. 資料の独占で個人（仲間）が利益を上げるモデル vs. 資料の共有で社会（世界）が利益を上げるモデルの戦い。
2. 国文研のNWプロジェクトは、オープンデータにより多様な分野の研究が展開。
3. オープンデータ = 自由な利用を許すライセンス vs. 著作権が利用を制限。
4. 個人蔵などの文化遺産では、著作権よりも所有権やプライバシーが課題。

コラボレーションの問題

1. **単著主義** vs. 共同研究のインセンティブ
→ 研究成果の出版方法の再考も必要。
2. デジタル分野では**共同研究**が当然の分野も成長（例：Digital Humanities）。
3. 分野を超えたコラボレーションは、**文化の違い**が大きい（例：Two Cultures）。
4. 学術研究を超えたコラボレーションは、**教育**につながる効果もある。

キャリアパスの問題

1. 「オープンサイエンスの波に乗って大丈夫？」は、特に若手には切実な問題。
2. オープンサイエンス的な研究活動の業績評価とキャリアパスは今後の課題。
3. 人文・社会科学は、上の世代からの監視やコントロールが厳しい？
4. 硬直的かつ減点式の人事システムは、新分野への挑戦に負の影響を与える。

オープンサイエンスと現代化

1. 本質はデジタル（ネット）革命による研究の現代化。オープン化は一側面。
2. 「よりよい」研究 = オープンの価値は、摩擦や障壁を減らし、関係を生むこと。
3. 現代化に伴い生まれるフロンティアは、どんな世界になるのが望ましいか？
4. Yes we canの精神 = 「オープン」概念を梃子に、新しい仕組みを作り出す。

オープンサイエンスは人文・社会科学を変えるか？

1. オープンサイエンス≠アウトリーチ。現在の研究スタイルを維持したまま、外に向けて「人文・社会科学を発信・宣伝する」だけでは済まない。
2. 人文・社会科学の長年の「伝統」が、現代化への障壁になりかねない？
3. 守るべき「伝統」は大事にしつつ、現代化すべき点は積極的に変えていく。そのための概念と事例の共有を行う。